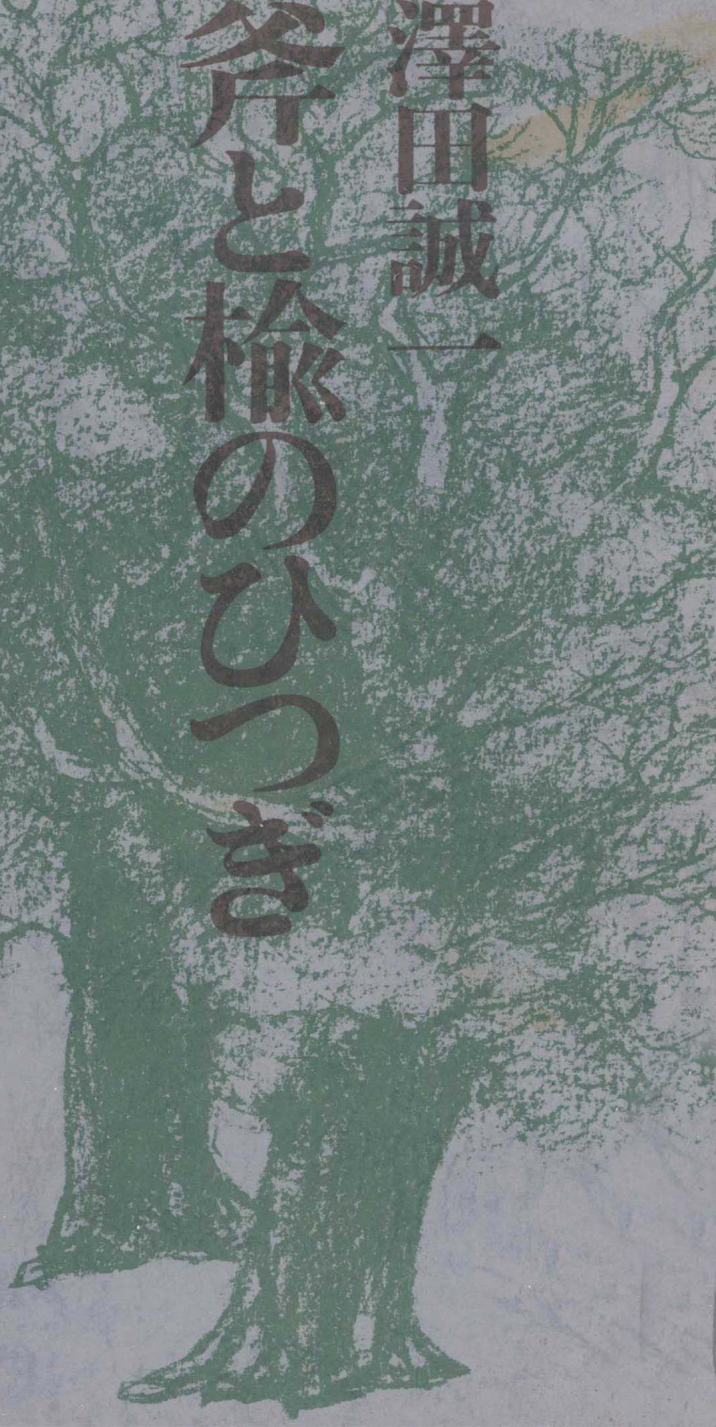


澤田誠一

斧と楡のひつぎ



青娥書房

と榆のひつぎ

澤田誠一



青娥書房

著者略歴

澤田誠一

住所・札幌市豊平区平岸1-15

大正9年9月札幌生

「札幌文学会」同人，「北方文芸刊行会」発行人

著書・「耳と微笑」七曜社，「久保栄の思い出」ふやら新書，「北の夏」河出書房新社，なお，「斧と楡のひつぎ」は昭和43年度北海道新聞文学賞，直木賞候補作品

斧と楡のひつぎ

昭和50年4月10日 改装版発行

定価 980円

著者 澤田誠一

〈検印省略〉

発行者 加清蘭

印刷・製本 新興印刷製本株式会社

発行所 株式会社青娥書房

東京都千代田区三崎町3-1-11

電話東京(264)2023 振替東京21400

1092-11030-3972

目次

斧と楡のひつぎ

5

栗橋・八月十五日

装画
装幀

森本三郎
小松宋輔
安彦勝博

斧と楡のひつぎ

斧と楡のひつぎ

どこかすさま風の洩れるような、音にならない笛の音のような、情ない呼吸音がしゃがれた溜息と一しよに口から洩れる。それは熱でおかしくなった内臓皮膜のどこかのすき間から洩れてくる私の身体の音色なのだが、それが合図で容赦なく発作が来る。そうなると私はただじっと汗まみれになり口を開いて時間の経過を待つよりしょうがない。佝僂病患者のように身体を折って横になってみたり、うすい肋骨の走る胸をかきむしって無数のかき傷をつくってみたりしたこともあったが、もう近頃は疲れはててそれも出来ない。ぼんやり眼を見開いて天井をみているだけである。

太い注射針を静脈にさされ、看護婦から汗を拭われながら夢魔のような状態からさめると、ちやうど私のかき傷の残る胸のあたりの皮膚は紫とか黒とか、それに黄ばんだ斑点までまじってまるで屍体の色をしている。つまめば布でもひっぱるようにどこまでものびて来そうな弾

力のない皮膚。その下に石でも呑んだようなまるい腹がふくれている。悲しくなるというか、情ないというか、われながら正視できない醜い胴が私の顎の下につながってそこだけ、まるでべつの生物のようにうごいている。

心臓性喘息、それが私の病氣の名前で、発作もこれで三、四度どころか、十度二十度を数える。

考えてみれば私の五十年、たった一人変らず私についていた友人がいたとすればこの病だけかもしれない。が、こんどというこんどは、この友人とも別れる気がする。発作の回を重ねるたび、こいつの襲いかたが尋常でなくなってきたのである。

私の年齢ではもうつきあいようも抗いようもないのかもしれない。そして、この薄緑色だかクリーム色だかに塗られたホテルのような病院の一室で眼を閉じる気がする。

考えてみれば私の死の部屋としてこの部屋がふさわしいのかどうか。ここで死んでよいものかどうか……。

文学博士北方大教授志場芳英^{しほよしひで}の私には、あるいは似つかわしい死の部屋であるかもしれないが、死がいよいよ確かなものとなつて来ると、そうでない気がする。違っている気がする。

クッションのきいた真新しいベッド、やわらかい蒲団、のりのきいたシーツのなかで、アカシヤの梢ごしに向いのビルの屋上のアンテナや旗のひるがえる景色を眺めながら死んでいってよいものかどうか、ということをしきりに疑うし、迷う。

海岸沿いの国道から二里、山奥にはいった熊笹と森に囲まれた小部落で働きづめに働いてなお

貧しく老いた両親、兄弟、妻の朝子^{あさこ}、息子の康司^{やすじ}、よき助手であつた倫子^{りんこ}や享子^{きょうこ}ばかりでなく、誰かの口まねじみるが、かけねなしに私の生命同様、いや私一人の生命よりなお愛したへ滅びゆく民族と、もの悲しげに呼ばれるI族二万の行末を見定めることもなく死んでいつてよいものか、どうか、ということに迷う。

こんなことは朝子にいつてもわかるまい。朝子はともかく辭書 of 原稿浄書だけで頭がいっぱいというふうである。今日も病床にノートをもつて来て、口述の訂正をして歸つた。ローマ字と仮名をまぜてI語を表記しているのだが、音声でなく音韻で表わすことがまだよくのみこめないらしい。そこで清書しながらつい間違えるのである。

その朝子は今日も息子 of 康司については何も云わずに歸つた。仕事のことはおれの領域で朝子にどう出来るといふわけではないし、それを未完のまま死ぬことなど考えてみたこともない。だから、朝子もなおあせり氣味に頭がそこにしかゆかないというんだらうか。が、それにしても、康司がたとえ靴みがきであらうと土方であらうと職について働いているとか、あいかわらず、家によりつきもせずにおらぶらしているとか、していないとかの話をしてくれてよさそうなのにそれをしない。朝子が私に話をするとなればそんな話でないのか。朝子はいま私が何をしりたがつているのか、それを知っているんだらうか。知っているからその話を避けているんだらうか。それは、いたわりでない。その話がないばかりに私の心がどんなに痛むか、あらぬ想像に苦しめられているのか、朝子は知らないだらう。

康司が小学校の門をくぐつて一週間ほどたった日であらうか。もう授業がはじまっているはず

の午前九時頃、私はひっそり、庭のすみにしゃがみこんでいる子供の姿をみたことがある。残雪とかすかに雑草や垣根ぞいの落のとうが芽ぶいている風の冷たい庭。そこに肩をまるめてふるえるようにしてしゃがみこんでいる康司のうしろむきの背中には子供に思えない暗い孤独感がしみていた。

妻と話して私は康司の手をひいて学校にいった。しかし康司は、校門までくるとそこから一歩も動こうとしなかった。どうすかしてみてもだめだった。校門にしがみつくと、その手を引離すと瞬にしがみつくと泣きもせず理由もいわず、ただ歯をくいしばってそうするのである。

大人の力でどうこうできぬわけではない。

「ダメじゃないか」

と、ぐいと体を抱きかかえ、はぐようにして、塀から康司を離した。子供は私の腕のなかでもぐくのをやめた。そして、ゆっくり首をねじって私を見た。

おびえるようにしばたたく長いまつげの奥に涙があふれようとしていた。

「意気地なし」

そう何度か自分に呼びかけてきた言葉をはじめ私は息子の顔に浴びせた。

そのとき、一階の真ん中あたりの教室の窓があいて、そこに子供の顔がかさなりあうように並んだ。

その無数の色白の子供達の顔をみたとき何が私の胸のなかをかすめたか。私はその子供らの顔にまじった私を見たのだ。子供の康司でなく子供の私のまじっていることを。そしてそこに何が

起きているのか、起きねばならないのか、私は何十年へだてた少年時代の私をそこにありありと再現することが出来た。

それは幻のうちでなく、眼の前の息子の康司に再現されているのを、私はしった。私はある強い感情にしめつけられながら息子の手をとってそこに立っていた。

荒い砂でもまじったような北国の春風が親子に吹いていた。

教室の窓にかさなりあつた顔がひっこみ窓がしめられて間もなくだった。紺セルのツープースを着た小柄の女教師が白い運動靴で駆けだして来た。

「どうしたの康司ちゃん」

そう呼びかけて子供の肩に手をおいた女教師のブラウスと運動靴の白さが眼にしみた。

「ウン？ 遅れちゃったの、それでお父さんと一しょに来たの。よかったわね、お父さんに連れて来て頂いて……。先生遅れて来てもなんにも怒らないのよ。さ、こんどは先生と手をつないで教室へ行きましょうね……。サ」

爪のさきに白墨の粉がついていたが、それがなお好ましい感じの小さな手が康司の肩にまわされた。倫子を見、倫子の声を聞く最初だった。倫子は子供を抱くようにしながら、

「志場先生でございますね。私、担任の霜山でございます」

と挨拶をした。

「志場です。今朝はどうしたものかぐずられましたね」

と私も挨拶をした。

「そう、ぐずったの、泣いちゃったの？ お父さんに甘えちゃったかな」

倫子は康司の顔をのぞきこみながら、そう云うのだが、それは親の私にも聞かせている言葉のようだった。

倫子は私の掌のぬくみの残っている康司の手をとって長いグラウンドをつつきって行った。その後姿を見ながら私はもう一度私の掌にのこった康司のぬくみを握りしめた。倫子は途中でちょっと立ちどまり、子供とつないだままの手をあげて私に会釈した。

私は翌日もその翌日も子供の手を引いて学校へ行った。

「毎朝ご苦労さまでございます」

という倫子に、

「いえ、朝の散歩のつもりなんです」

と答えたものの、じつは、この女教師に子供を渡すことで安心する私の一日がはじまるのだった。そして、気づいてみると、康司の手をひいて学校へ行くのはひそかな楽しみにさえなっていた。

話は先へとぶが、康司が、小・中・高校を通して先生になつき、先生もまた可愛いがってくれた人というのはこの倫子先生だけだったのではあるまいか。

のちに倫子の両親たちが居を構えるようになったモイワ山麓の峠へ遠足したときの倫子と一しょに写した康司の写真がある。林の樹々によく新芽がもえ、タンポポやスミレの咲く高原に子供達がちらばり、康司が甘ったれた顔で倫子のひざに抱かれている。その前にひろがっている

弁当をつつんだ紙や果物。康司の一番大切にし、手垢で汚してしまった写真だ。康司はその遠足の帰り倫子の背中で眠った。眠った子を玄関先で受取り、

「すみませんね、すみませんね先生」

と、朝子はよだれや泥で汚れた倫子の服をしきりにふいてわびた。そんなことから朝子は康司をつれて倫子の家をたずねたりするようになったのだ。

私が康司の手をひいて学校にゆく楽しみはどのくらい続いたろうか。康司が私と一しよに学校にゆかぬと云い出したのだ。ママと行くという。それはそれでいいのだ。しかし、康司の心にあったものはそう単純なものでなかった。

それは、珍しく重いほど花をつけた庭の山桜の花がしとしと雨でも降るように散っている日の夕暮れだった。

落の葉の上にも水仙の葉の上にもそれは散り、水たまりは白い花びらで埋まった。たまに飛んで来て硝子戸のさんにたまるものもあつたり、ただ風に流されてゆくのもあつた。うす緑色に茂った雑草の地面がにぶい銀色にかわった。

重い白い花の雫。それは夜になっても降っていた。

私はそのあつけないほど短い命を終って散りしきる花の雨をみるともなく見ながら考えていた。

この花の下でおれは酒盛りをしたことはない。そういう習慣はなかった、といって、この木の枝を門口にたてて魔よけにしたこともなかった。えぞ山桜はカリンパでない。カリンパは桜の

皮、カルンパニアパッポは桜の木の花、I族には桜がない。桜というものがない。桜の皮のついている木はあるが桜はない。植物の名前を云う場合、その全体を表わす名前はない。生活に関係のある一部についての名前がある。刀の鞘や矢筒や弓の柄をまいたり、舟や曲げものをとじたりする実用品だから桜の皮には名前があるが、桜はない。

桜の花が散る。銀色の雨になって夕暮れ花が散るという桜はI族には関係がない。花の美しさがある。桜といえは花の美しさが先にたつ。花見酒を飲んでも飲まなくとも花の美しさに変りない。私だけでなくI族のなかに私と同じように桜をみる者がいる。いるのでなく、全部そうかもしれない。逆に云えば、桜の皮があつて桜のないI族はもはやいない。つまりI族は、いなくなつたのである。

そんなことを思つて私は苦笑した。いつもと同じことをまた私が考えているからだ。そうではなく、今日はこの庭さきの花見でもしようか、朝子に云つてここで少しの酒でも飲んでみようか、などと思つている矢先だつた。……

廊下とふすまをへだてた茶の間から親子の話し声が聞えて來たのだ。

「母さんはなぜ父さんとケツコンしたんだ。……母さんは日本人じゃないか。日本人の母さんがなぜ父さんとケツコンしたんだ」

重い刃物が、私の胸元をねらつてどきりと投げつけられてきたかのようにだつた。

思わず私は声をのんだ。身を伏せるようにして息子にこたえる妻の言葉をまつた。

「シート」